最終版

平成 30 年度　大阪教育大学附属平野小学校　研究総論

研究主題　　「未来を『そうぞう』する子ども」（第３年次）

１　研究の概略

１）　未来を『そうぞう』する子どもとは

今の世の中は，科学技術が日増しに進歩し，社会構造も急速な変化が進み，未来に対して見通しを持ちにくい時代となっていると考えられる。そのような時代を生きていく子どもたちが未来に対して，希望を持って強く生き抜くことができるのか。考えた結果，どんな状況においても，希望をもって自ら行動し，みんなでよりよい未来をつくろうと，あきらめずそうぞう（想像・創造）し続けられれば，よりよい未来をつくっていくことができるのではないだろうかという考えに至った。自分が置かれている状況に関わらず，その中で希望をもち，よりよい未来を求めて自ら行動を起こすことができる，人と共に協働してよりよい未来をつくることのできる，そのような過程に意味や価値を見出し続けることができる。そんな力があれば，先の見えない未来においても，従来，評価されてきた資質・能力に加えて新たに資質・能力を発揮して，自分自身で道を切り開き，前を向いて生きていくことができるであろう。そこで，そのような「未来を『そうぞう』することのできる子ども」を以下のように定義した。

【未来を『そうぞう』する子ども】
どんな状況においても，共によりよい未来をそうぞう（想像・創造）しようと，「主体的実践力」「協働的実践力」「創造的実践力」を発揮し，自分，集団，社会・自然などに対して，多角的・多面的にアプローチし続けることができる子ども

２）　研究開発課題

「未来を『そうぞう』する子ども」を研究主題とし，「未来を『そうぞう』する子ども」の育成に向けて研究開発を進め，本年度はその第３年次となる。「未来そうぞう」という主題に向けて，以下の研究開発課題に取り組んでいる。

【研究開発課題】
新教科「未来そうぞう科」と「各教科における『未来そうぞう』」を設定し，学校教育全体において「主体的実践力」「協働的実践力」「創造的実践力」の３つの資質・能力を育成することを目的として教育課程及び教育方法，評価等の研究開発を進めていく。

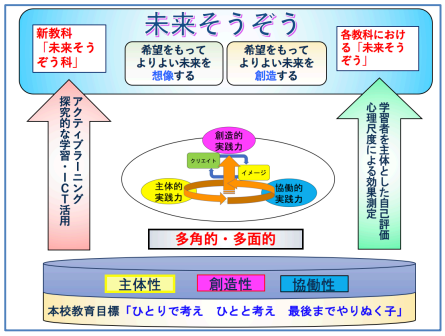

図１　本研究の概略の構造図

３）　未来を『そうぞう』する子どもに必要となる３つの資質・能力

「未来を『そうぞう』する子ども」に必要な資質・能力を「主体的実践力」「協働的実践力」「創造的実践力」の３つ，設定した。

【未来を『そうぞう』する子どもに必要となる３つの資質・能力】
主体的実践力……対象に対して主体的，自律的にアプローチすることができる力
協働的実践力……多様な集団の中においても，積極的に関わり協働的にアプローチすることができる力
創造的実践力……よりよい未来をつくるために，アプローチし続ける中で，新たに意味や価値を見出すことができる力

本校では，約 50 年近く続く同じ学校教育目標**「ひとりで考え　ひとと考え　最後までやりぬく子」**を基軸として，「未来に向かって力強く生きていく豊かな人間性」を育むことを重視してきた。この学校教育目標における「ひとりで考え」は知的好奇心に基づく「主体性」，「ひとと考え」は支え合う「協調性」，「最後までやりぬく」は自己実現に向かう「創造性」を指すものである。この本校における取り組みを基盤とし，これらを実践できる力を確実に育むことによって，「未来を『そうぞう』する子ども」を育成することができるのではないか。そこで，それぞれ「主体性」「協働性」「創造性」を実践することのできる力を**「主体的実践力」「協働的実践力」「創造的実践力」**とし，学校教育全体において育成しようと考えた。

３つの資質・能力の関係性については，図２に示す通りである。子どもたちは対象にアプローチする時に，主体的，自律的に考えたり行動したりする。他者と協力することでその考えや行動はより広がり，深まる。考えや行動に新たに意味や価値を見出すことは対象の未来をよりよいものへとつくり変え続けることである。この一連の営みの中で子どもたちが主体的実践力と協働的実践力を両輪として発揮することによって，創造的実践力を育成できる。これらの資質・能力は予測の困難な時代において，新しい未来を切り拓き，生き抜くために必要になると考える。

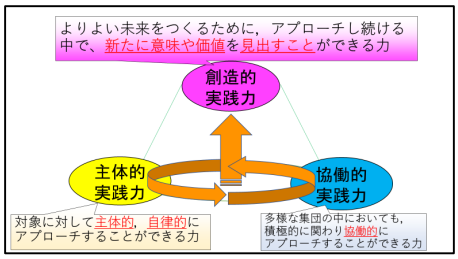

図２　３つの資質・能力の関係性

２　研究の内容

１）“未来を『そうぞう』する子ども”に向けての構想

本研究では，「未来を『そうぞう』する子ども」の育成に向けて，学校教育全体で三つの資質・能力を育むために，新しく**新教科「未来そうぞう科」**及び**「※各教科における『未来そうぞう』」**を設定した（図３）。「そうぞう」には，よりよい未来を「想像」する，よりよい未来を「創造」するという両方の意味を兼ね備えている。とりわけ，三つの資質・能力を育むことに特化した新教科「未来そうぞう科」では，自分，他者，社会・自然を学びの対象として，子ども自身が問いをもち，協働的に活動しながら，様々な方法で解決活動を行う。図３における「未来そうぞう科」と各教科が重なる部分は，育成すべき資質・能力において主に関わる部分であり，中には学習内容が関わる教科もある。

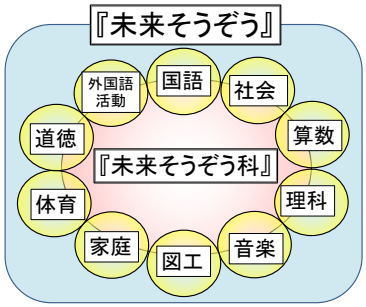

図３　各教科と「未来そうぞう科」の構想図

未来そうぞう科を核に据え，各教科も含め，**“未来を『そうぞう』する子ども”**の育成をめざすこととする。

※道徳と外国語活動においては，平成 30 年度より新教科等として創設されるため，本校においては，例外的に教科として位置付けるものとする。

２）　「イメージ・クリエイト」

子どもは，「イメージ（想像）」と「クリエイト（創造）」を繰り返しながら対象に対して向き合っていく。子どもたちは学びの対象と向き合う中で現状がよりのぞましいものへと変容することを思い描き，新しく行動をおこしたり，立ち止まったりする。このような一連の営みは「未来そうぞう科」だけではなく，既有の教科にお

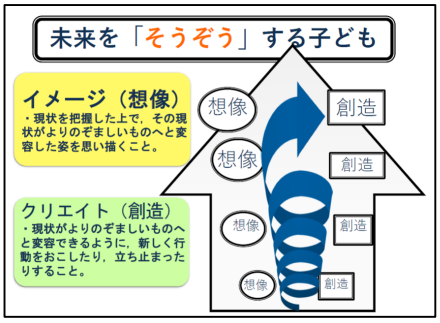

図４　「イメージ・クリエイト」

いても行われると考える。イメージ・クリエイトは互いに往還しながらも，より広がり，深まりのある「イメージ」がより具体的な「クリエイト」につながり，その「クリエイト」がさらなる広がり，深まりのある「イメージ」へとつながっていく。このように「イメージ」と「クリエイト」の質を高めながら「未来を『そうぞう』する子ども」をめざして進んでいく。

３）新教科「未来そうぞう科」

①　新教科「未来そうぞう科」とは

新教科「未来そうぞう科」とは，「未来を『そうぞう』する子ども」に必要な「主体的実践力」「協働的実践力」「創造的実践力」という資質・能力を６年間かけて育成することを目標として，１～６年生を対象に設定した新教科である。これは，現学習指導要領の「生活科」「総合的な学習の時間」「特別活動」の時間を合わせて設定している。基本的には，従前の「生活科」「総合的な学習の時間」「特別活動」の時間の学習内容を基盤としたものである。ただし，「生活科」において９つの内容が定められているが，**現状の「総合的な学習の時間」には内容が定められていないこと，「特別活動」における「学級活動」においても学習内容は示されているものの，具体的な学習展開については十分に示されていない**ことをふまえ，**新教科「未来そうぞう科」**では，**統合的なカリキュラム**として学習内容の具体的な視点を「教科」として示していく。

②　未来そうぞう科の目標

【未来そうぞう科の目標】
「自分自身」「集団・人間関係」「社会・自然」に対して実践的・体験的な活動を通して，未来そうぞう科の見方・考え方を働かせて，どんな状況においても希望をもち，共によりよい未来をそうぞうしようとするための「主体的実践力」「協働的実践力」「創造的実践力」を育成することを目指す。

○「自分自身」「集団・人間関係」「社会・自然」に対して実践的・体験的な活動を通して

「未来そうぞう科」の学習内容として，３つの領域を設定した。学習テーマの視点は以下の通りである（表１）。

表１　学習テーマの視点

A　自分自身を対象とする内容
自分自身を知ることで，希望をもって生きていく自分自身の将来の姿を「想像」し，そのイメージを実現し「よりよい未来」を「創造」するためにはどのように生きていくことが望ましいのか，自分自身に深く，広くアプローチすることができる学習展開を行う。

B　集団や人間関係を対象とする内容
多様な集団との関わりの中で，人の気持ちを「想像」し，人との関わりを深めることが「よりよい未来」の「創造」へとつながっていくということを実感でき人間関係形成につながるように，人と人との関わり方にアプローチすることができる学習展開を行う。

C　広く社会や自然を対象とする内容
自分を取り巻く「社会」や「自然」について「自分事」ととらえ，社会」や「自然」の「よりよい未来」の「創造」に向けて，それらに対して自分なりにできることを「想像」し，社会や自然にアプローチすることができる学習展開を行う。

A 領域は自分自身の「好きなこと」を追求していく中で，自分自身を深めていく。さらに教師や保護者，友だちなどと関わることで，新たな自分に気づき，自分自身を広げていく。**B 領域**はクラス，学年，異学年，特別支援学校や幼稚園の集団を学びの対象とする。学びの対象である集団が変化する中で，子どもがそれぞれの立場や関わり方を変化させていく。C

領域は身近な自然や生命，地域や現代の社会や環境における諸問題などを学びの対象にしている。その中で関わる社会・自然を広げていく。その対象に対して，子ども自ら問いをもち，解決していく。ABC の領域はそれぞれに独立して働くものではなく，互いに働きかけたり，働きかけられたりする。さらには，既有の教科も含めて，一体的に補い合って高まっていく活動であると考える。

実践的・体験的な活動とは未来そうぞう科の学習活動であり，子どもが活動を通して，学ぶ教科であるということを示している。

○未来そうぞう科の見方・考え方を働かせて

ここでは，未来そうぞう科において，どのような視点で対象を捉えどのような考え方で思考していくのかという対象を捉える視点や考え方を示す。未来そうぞう科の見方・考え方とは**『イメージ・クリエイトの往還を通して，多角的・多面的にアプローチし，過去・現在・未来と関連付けながら，よりよい未来の実現を目指そうとすること』**である。

「イメージ・クリエイトの往還」とは子どもたちは学びの対象と向き合う中で現状がよりのぞましいものへと変容することを思い描き，新たに行動をおこしたり，立ち止まったりすることを繰り返すことである。

「多角的・多面的にアプローチし」とは対象を一面的に捉えるのではなく，子ども自らの過去の経験や各教科等で身につけた既有の知識や技能，友だちの考えなどを基に様々な視点で対象にアプローチしていくこと。そして対象にアプローチすることによって得られた経験を蓄積していくことで，対象を改めて捉え直し再び対象にアプローチしていくことである。多角的・多面的な視点で対象にアプローチすることにより方向性をもって「イメージ・クリエイト」が往還される。

「過去・現在・未来と関連付けながら」とは子どもたちの時間軸を表し，対象を過去の経験と関連付けたり，現在の現状把握に努めたりして，対象がより望ましい未来に近づくために今，何ができるかを考えることである。ただし子どもによって，未来を見通す空間や時間軸は異なる。その点を踏まえながら，領域ごとにおけるよりよい未来の本質的な課題を明確にすることが大切である。

○どんな状況においても希望をもち，共によりよい未来をそうぞうしようとする

未来そうぞう科における目指す子どもの姿である。未来そうぞう科の見方・考え方を働かせて対象にアプローチすることにより，方向性をもって「イメージ・クリエイト」が往還され，子どもの主体的実践力や協働的実践力が両輪となって発揮され，対象に新たに意味や価値を見出すことができる力（**創造的実践力**）が育成できると考える。

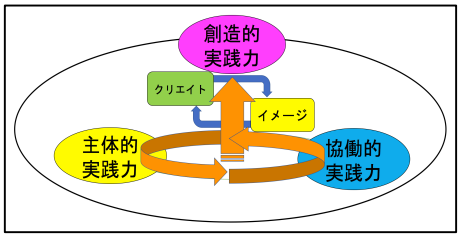

図５　三つの資質・能力と
イメージ・クリエイトの関係性

４）　「各教科における『未来そうぞう』」

本研究を進めるにあたって，各教科においては，現行の学習指導要領に沿って従来通りそれぞれの教科でつけたい力をねらい，学習を進めていくと同時に，本研究でねらう「主体的実践力」「協働的実践力」「創造的実践力」の３つの資質・能力の育成にも取り組んでいる。各教科の特性を発揮し，未来を「そうぞう」する子どもの育成に向けて各教科が担う部分を焦点化し，検証することで本研究がめざしている３つの資質・能力がより豊かに育むことが可能になるのではないかと考える。

３　昨年度の成果と課題と本年度の研究

１）　新教科「未来そうぞう科」における成果と課題

第２年次となる昨年度は，一昨年度の実施カリキュラムをふまえて，より系統性のあるカリキュラムづくりに力を注ぎ，系統立てて「未来を『そうぞう』する子ども」に必要な資質・能力を育成できるように検討してきた。各学年としての新教科「未来そうぞう科」ではなく，ABC 領域別の縦割りのグループで新教科「未来そうぞう科」を考え，計画したことにより，実施カリキュラムを基に，系統性について考慮した新たなカリキュラムを作成することができた。また，新教科「未来そうぞう科」において３つの資質・能力を系統的に育むため，また育みたい具体的な子どもの姿を共通理解するために，ABC 領域別に３つの資質・能力を系統的にまとめた「資質・能力表」を作成した。

一方で新たなカリキュラムを作成したが，発達段階や各教科・領域の学習内容に応じた系統性を考慮しながら，カリキュラムを修正することや A 領域において学年の実践例や単元の捉え方が異なっているため新たな単元開発を進めていくことが必要であることが明らかとなった。また子どもの具体的な姿の見取りを深め，評価について考えていく中で，３つの資質・能力は並列ではなく，３つの資質・能力の関係性を構造化して整理する必要があるということも明らかになってきた。本年度評価していく中でその関係性を明らかにしていきたい。

２）　「各教科における『未来そうぞう』」における成果と課題

昨年度は各教科で，その特性を活かして，どのように３つの資質・能力および態度を育んでいくことができるかを各教科が設定し，アプローチしていくこととなった。成果としては，教科の特性を踏まえて，場の設定や単元構成，単元開発を行うことで，自分たちの教科が設定した実践力が発揮される場面や子どもの姿を授業において提案することができた。しかし，既有の教科のみによって，３つの資質・能力が育まれたかどうかは，本時や単元の見取りだけではわからないことが明らかとなった。既有の教科が未来そうぞう科にどのような視点でアプローチできるかを改めて検討する必要がある。

４　第３年次の研究の概要

これらの第２年次の研究結果をもとに，本年度の研究の概要を下の図６に示す。

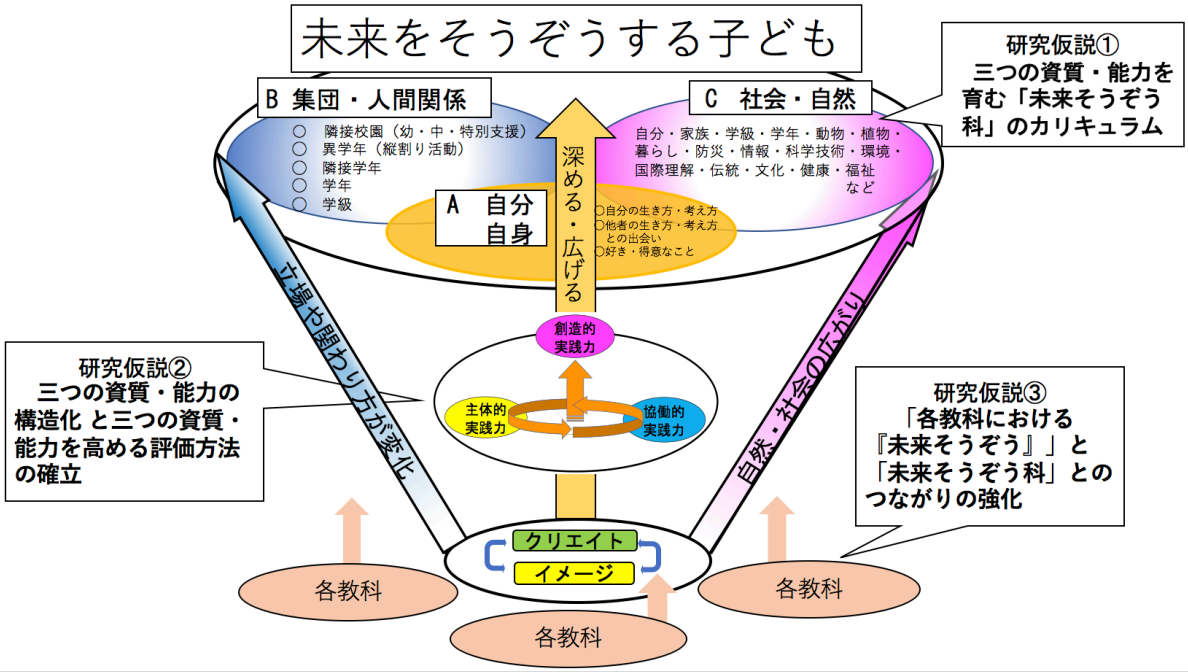

図６　本年度の研究の概要

本年度の研究の柱を以下に示す。

【３つの研究の柱】

- **３つの資質・能力を育む「未来そうぞう科」のカリキュラム**
- **３つの資質・能力の構造化と３つの資質・能力を高める評価方法の確立**
- **「各教科における『未来そうぞう』」と「未来そうぞう科」とのつながりの強化**

５　本年度の研究の３つの柱

本年度の研究の３つの柱を設定した。以下に述べる。

１）　３つの資質・能力を育む「未来そうぞう科」のカリキュラム

子どもの情意面や道徳的価値，子どもの発達の段階，各教科の学習内容を踏まえて「未来そうぞう科」における学年ごとに育てたい子ども像を明らかにすることで，キーコンピテンシーベースのカリキュラムが作成され，系統的に３つの資質・能力を育成することができる。

昨年度は子どもにとって「学びの必然性」が生み出されるカリキュラムとなるように，子どもの思いやねがいを大切にして，ABC 領域別に３つの資質・能力を系統的にまとめた「資質・能力表」をもとにカリキュラムづくりを進めてきた。しかし，領域ごとの「資質・能力表」を作ることが目的となり，具体的に育みたい子ども像をイメージした単元開発がなされにくかった。そこで，改めて未来をそうぞうする子どもとは何か，その子ども像に向けて，それぞれの学年がどのような資質・能力を身につけておくとよいのか，またその資質・能力が ABC 領域に系統性のあるものであるかを再検討する必要がある。本年度は第３年次においては未来そうぞう科の学習指導要領 試案を作成していく。

①　領域ごとの目指す子ども像の設定と資質・能力表の 15 回目の改訂

未来そうぞう科において，それぞれの領域で育みたい子ども像を職員全体で共有し，その子ども像に向けて，低学年，中学年，高学年がどのような資質・能力を身につけておくと良いのかを改めて，検討し直した。下の表２は各領域の目指す子ども像と 15 回目の改訂を繰り返した未来そうぞう科の「資質・能力表」である。この「資質・能力表」を現段階における暫定的な指針として，未来そうぞう科の学習指導要領に示す。また，領域ごとにおける目指す子ども像についても学習指導要領 試案に示すものとする。

表２　未来そうぞう科 の「資質・能力表」(15 回目の改訂)

A　自分自身を対象とする内容				
自分自身を知ることで，希望をもって生きていく自分自身の将来の姿を「想像」し，そのイメージを実現し「よりよい未来」を「創造」するためにはどのように生きていくことが望ましいのか，自分自身にアプローチすることができる学習展開を行う。				
【A 領域における目指す子ども像】 自分を肯定的に受け入れ，他者との関わりの中で自分を捉えなおし，未来をよりよく生きるために，今の自分に意味や価値を見出し続けることができる子ども				
高学年	創造的実践力	過去・現在を根拠に見通しをもって、多角的・多面的な見方・考え方を働かせて、自分のあり方に意味や価値を見出し続けることができる。		
	主体的実践力	自分を肯定的に受け入れ、自分を捉えなおし、困難があってもくじけずに自ら対象に関わり続けることができる。	協働的実践力	他者との関わりの中で自分を捉えなおし、自分とは違う立場の人の見方・考え方と、比べたり関連付けたりして、受け入れることができる。
中学年	創造的実践力	過去・現在を見通して、様々な見方・考え方を働かせ、今の自分を高めようとする過程に対して意味や価値を見出すことができる。		
	主体的実践力	今の自分を高めようと、自分の決めた課題に対して自ら対象に関わり続けることができる。	協働的実践力	他者との関わりの中で、今の自分を高めようと自分とは違う立場の人と協力することができる。
低学年	創造的実践力	課題を解決するために、現在の興味から、自分なりに工夫し、自分を高めることができる。		
	主体的実践力	自分の決めた課題に対して自ら進んで活動することができる。	協働的実践力	課題を解決するために、友達と協力することができる。

B　集団や人間関係を対象とする内容				
多様な集団との関わりの中で，人の気持ちを「想像」し，人との関わりを深めることが「よりよい未来」の「創造」へとつながっていくということを実感でき人間関係形成につながるように，人と人との関わり方にアプローチすることができる学習展開を行う。				
【B 領域における目指す子ども像】 自分が所属する集団での課題解決を通して、仲間意識をもち、多様な集団の中で活動することへの意味や価値を見出し続けることができる子ども				
高学年	創造的実践力	自分が所属する集団での課題解決を通して，多様な集団の中で活動することへの意味や価値を見出し続けることができる。		
	主体的実践力	自律的に判断しながら、方向付けて活動することができる。	協働的実践力	自分の役割を理解して，他者の思いや願いを受け入れ認め合いながら，協力することができる。
中学年	創造的実践力	自分が所属する集団での課題解決を通して、自分の役割にやりがいをもつことができる。		
	主体的実践力	集団の関係や活動内容がよりよくなるように意見を出したり、自ら進んで楽しんで活動に参加したりすることができる。	協働的実践力	他者の思いや願いを受け入れ，協力することができる。
低学年	創造的実践力	自分が所属する集団での課題解決を通して、人と関わることへの楽しさをみつけることができる。		
	主体的実践力	楽しんで活動に参加することができる。	協働的実践力	他者の意見を聞いて，仲良くすることができる。

C　広く社会や自然を対象とする内容				
自分を取り巻く「社会」や「自然」について「自分事」ととらえ，社会や自然の「よりよい未来」の「創造」に向けて，それらに対して自分なりにできることを「想像」し，社会や自然にアプローチすることができる学習展開を行う。				
【C 領域における目指す子ども像】 よりよい未来をそうぞうするために，他者と共にどのような課題に向けて，課題解決のためにアプローチし続ける子ども				
高学年	創造的実践力	対象のよりよい未来の実現のために、様々なものごとを多角的・多面的に捉え，それぞれの意味や価値を見出し、活動したり発信したりし続けることができる。		
	主体的実践力	対象を自分事として捉え、これまでの学びや経験をいかして、課題解決に向けて自律的に活動することができる。	協働的実践力	自分とは違う価値観を受け入れ認め合いながら、協力して対象に働きかけることができる。
中学年	創造的実践力	対象のよりよい未来のために、現状をとらえ，多様な方法からつながりを見出しながら，見通しをもって考えたり活動したりできる。		
	主体的実践力	対象を自分とつなげて捉え、これまでの学びや経験をもとに、課題解決に向けて試行錯誤しながら活動することができる。	協働的実践力	自分とは違う様々な思いや考え方を受け入れ、協力して働きかけたり活動したりすることができる。
低学年	創造的実践力	対象のよりよい未来のために、自分なりに工夫しながら、考えたり活動したりできる。		
	主体的実践力	対象に関心をもち，これまでの学びや経験を思い出し、課題解決に向けて楽しんで活動することができる。	協働的実践力	自分とは違う思いや気付きを知り、協力して働きかけることができる。

②　本年度の実施計画カリキュラムと内容構成

表２の未来そうぞう科の資質・能力を系統的に育むことを目指し，過去２年間の実践を踏まえ，本年度，取り組んできた実施計画カリキュラムを表３に示す。

表３　平成 30 年度　第３年次の実施計画カリキュラム

	自分自身を対象とする内容： ⇒「すき」から考える自分の生き方	**集団や人間関係を対象とする内容：** ⇒多様な他者との関わり	**広く社会や自然を対象とする内容：** ⇒具体的に姿は見えないが考えないといけない他者・社会・環境
6 年	アイデンティティの芽生え **My Life →from now on→** ・自分の現在の姿をじっくりと見つめた上で，将来なりたい自分の姿について考える。	**友だちタイム ～運営しよう～** リーダーとして，友タイを円滑に運営するために，他学年の特質を生かすことができるように考えながら，事前の計画や当日の進行を中心に行う。	**科学技術を体験しよう 自然と平和について考えよう よりよい未来をつくろう** ・自分たちが生きる世の中の事象について，自分自身との対話を通して過去―現在の事象から「持続可能性」を探っていく。
5 年	自分との対話 **ＬＩＦＥ ～他者と出会い 自分を考える～** ・様々な考え方・生き方を聴くことから自分と対話しながら，どんな自分も肯定的に受け入れられるようにする。	**友だちタイム ～未来のリーダーになるために～** １年後，自分たちが６年生になることを見据えて，今の６年生の姿から運営の方法や他学年への関わり方について考えていく。	**Re: ～居心地よくするために改革しよう～** みんなにとって居心地よい場をつくるために，ダッシュ村（仮）を改革したり，楽しいイベントを企画したり，自分たちで考え出す。
4 年	個々の存在の尊重 **Let’s challenge 好きなこと ～好きを Switch～** ・苦手なことや本気でやってみたことがないことにも果敢に挑戦する。	**いろいろな人と出会おう ～特別支援学校・台湾の小学生との交流～** ・附属特別支援学校の児童や台湾の小学生との交流の中で，他者を受容し，認める個々を養う。	友だちタイム **災害のニュースから学ぶ ～自分たちにできること～** ・被害の現状を把握し，自分たちができることを考え行動に移していく。 **タイムスリップ 大和川をめぐる過去から未来への命のバトン** ・地域の大和川を題材にして，学習を展開する。 （理科・社会との教科横断的な学習）
3 年	自分と他者の関係 **好きプロジェクト** ・「自分の好き」を中心に，他者との関わりの中で自分自身について考える。	**友だち班タイム ～遊びをそうぞうしよう～**	縦割り活動 **平野ＥＸＰＯ ～平野について昔・今・未来を楽しく学ぼう～** ・平野 EXPO の開催に向けて，プレゼンやポスター発表を行い，他者から得た評価をもとに新たな活動を創造しようとする。
2 年	他者意識の芽生え **すきを広げ・つなげよう** ・「すきなこと」と「係活動」を関わらせる活動を通して，自分の「好き」を周りに広げることで深めたり，友だちの「好き」を経験し視点を広げたりする。	**学校あんないをしよう** ・１年生にとっておきの場所を紹介したり，入ってみたいところへ案内したりする。 **秋を楽しもう** ・秋祭りを開くことを目的に，友だちと協力できることを考える。	**123 期の咲くやこの花館をつくろう ヒメちゃんと いっしょ** ・野菜やお花を育て，「何ができるだろう？」と考えながらたくさんの成功体験を積み重ねていく。生き物について調べたり，大切に育てる環境を創ったりする。
1 年	自立への基礎・自己肯定の基礎 **だいすき じぶん “「すき すき」やってみよう”** ・自分の「好きなこと」「やってみたいこと」を見つけ，継続して行う。	**だいすき なかま “いっしょに あそぼう”** ・学級・学年・園児や２年生とともに活動し，協力したり伝え合ったりする。	**だいすき しぜん “しぜんを たのしもう”** ・学校の自然や生き物に働きかけたり，生活や遊びに取り入れたりする。

〔平成 30 年度実施計画カリキュラム〕

これまでの未来そうぞう科の実践を内容面でまとめ直したものが，表４の未来そうぞう科の内容構成である。ただし，全ての内容を網羅するものではなく，子どもの実態・学校環境等によって変わるものである。子どもの思いや願いにそった柔軟なカリキュラムを目指す。

表４　未来そうぞう科の内容構成

A 領域：自分自身を対象とする内容	B 領域:集団や人間関係を対象とする内容	C 領域:広く社会や自然を対象とする内容	
好きなこと・得意なこと 様々な生き方・考え方との出会い 自分の生き方・考え方	学級・学年 隣接学年 隣接校園 (幼稚園・保育所・特別支援学校・中学校等) 異学年（縦割り活動） **※両者にとって意味のある活動であることが重要**	校庭 学校 地域 日本 世界 地球 宇宙	自分・家族・学級・学年・動物・植物・暮らし・防災・情報・科学技術・環境・国際理解・伝統・文化・健康・福祉など

２）　３つの資質・能力の構造化と３つの資質・能力を高める評価方法の確立

新教科「未来そうぞう科」が育成すべき，資質や能力としての「主体的実践力」「協働的実践力」「創造的実践力」の関係性を構造化して整理し，評価の観点を明らかにすることで，それぞれが発揮されやすい領域の特性に合わせた指導計画の立案や教師の手立てなどの改善が図られ，３つの資質・能力を高める評価方法を確立することができる。

昨年度，３つの資質・能力それぞれが達成できた子どもの具体的な姿を共有し，育みたい姿を共通理解することをねらいとして，ABC の領域別の資質・能力表を作成した。それぞれの授業ごとにルーブリックを作成し，子どもの行動や記録したシートなどを見取って教師が評価を行っていた。この方法では主体的実践力や協働的的実践力は見取ることができた。しかし，創造的実践力においては，共通理解が至らず同じように見取りにくいことや評価の観点が曖昧であるため価値のあるはずの子どもの考えや行動が埋没してしまうことなどの問題点が明らかとなった。何より，このような評価が子どもの資質・能力を高めるための評価であるかを改めて検討する必要がある。本年度は**①３つの資質・能力の構造化　②３つの資質・能力の評価の観点　③評価の観点の活用　④学習者を主体とした自己評価の在り方**　の４つに焦点を当てて研究を進めていく。

①　３つの資質・能力の構造化について

３つの資質・能力にその１つの授業で見取れるものもあれば，長い時間をかけて見取れるものもあるということが明らかとなった。主体的実践力や協働的実践力は，１つの授業のその瞬間においても発揮できるものである。創造的実践力においては，長期的な学びの蓄積が必要である。このような特性を踏まえて，３つの資質・能力を構造化すると，図７に示す通りとなり，子どもの主体的実践力や協働的実践力が両輪となって発揮されることによって，長期的に創造的実践力が育成できると考えられる。つまり，創造的実践力の中に，主体的実践力や協働的実践力が包括されると言える。このような構造化を踏まえて，評価の観点とその活用を整理することとした。

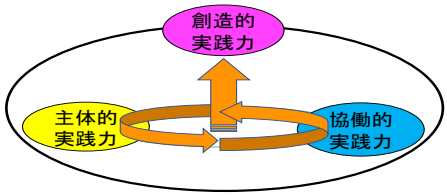

図７　３つの資質・能力の構造化

②　３つの資質・能力の評価の観点とそれぞれの視点

昨年度の授業実践のまとめ（報告書）をもとに３つの資質・能力を発揮している表れとして授業者が価値付けた子どもの具体的な姿を分析し，まとめたものが表５である。

表５　実践者が３つの資質・能力の表れとして価値づけている項目のまとめ

●・・成果として記載あり　○・・・成果や課題という価値づけはなく、その姿が記載あり　△・・課題として記載あり

				1C	1B	1A	2B	3C	4BC	5C	5B	5A	
				だいすき動物	友タイでハッピーメイキング	しってもらおうじぶんのこと	うきうきをつくろう	平野EXPO	未来へテイクオフ	ダッシュ村	遊びを通してもっと仲を深めよう	自分発見	
視点	考察より	ア	いろいろな経験を蓄積する	△								●	1
		イ	過去の経験を想起する	●	●			●	●	●			5
		ウ	過去の経験を生かす	●	●								2
		エ	様々な経験をつなぐ				●	●		●		●	4
		オ	新たな提案をする・課題を見出す	●				●		●			3
		カ	友達の考えを取り入れる			●					●		2
		キ	友達と考えや気づきを交流する		○	●			●		●	●	4
		ク	具体的にイメージする				●			●		●	3
		ケ	実際に行動に移す（クリエイト）				●	●		●	●		4
		コ	新しい発想・新たな気づきが生まれる		●					●	●	●	4
		サ	新たな試みにチャレンジする	●		△							1
		シ	自分なりに工夫する		●							●	2
		ス	意欲的に活動する			●							1
		セ	いろいろな視点から考える									●	1
		ソ	あきらめず何度もチャレンジする				●			△			1
	ねらいより	タ	多角的に考える									●	1
		チ	多面的に考える							●	●	●	3
		ツ	違いに注目する	●					●				2
		テ	対象にとってのよりよいを考える	●						●			2
		ト	様々な発想をもつ		●						●		2
		ナ	よさを見つける		●								1
		ニ	課題を見つける		●				●				2
		ヌ	様々な工夫を考える（創意工夫する）		●		●	●					3
		ネ	自己を表現する			●							1
		ノ	意見を取り入れる								●		1

さらに，本年度の実践者のインタビューや夏の研修で観点を検討し３つの資質・能力を発揮しているものを６つの観点とそれぞれの具体的な視点にまとめたものが表６である。上段には，教師が共有する文言，下段には，子どもに提示し共有する文言を載せている。

表６　３つの資質・能力の評価の観点とそれぞれの視点

教師側の観点	**①没頭**			**②協力**		**③見通し**			**④整理**			**⑤発信**		**⑥※1 レジリエンス**		
子ども側の観点	**①楽しむ**			**②助け合う**		**③見通す**			**④つなぐ**			**⑤人に伝える**		**⑥しなやかな強さをもつ**		
視点	**時間**	**触れる**	**姿勢**	**役割分担**	**交流**	**過去**	**現在**	**未来**	**比較**	**関連付け**	**分類**	**相手意識**	**発信**	**改善**	**意味づけ価値づけ**	やりぬく

この評価の観点は一人ひとりの資質・能力向上に向けての評価であり，現状の子どもの出来不出来を決定づけるためのものではない。単元のねらいとする観点を明らかにして，教師が手立てを考える。その観点に対する実際の子どもの考えや行動を見取る。教師自身が自分の授業を振り返り，子ども一人ひとりの考えや行動に価値を見出す。そして，その子のよりよい成長に向けて，指導計画の見直しや教師の手立てを考える。これらを繰り返すことで授業改善が図られ，３つの資質・能力が高められると考える。

この評価の観点は教師だけではなく，子どもと共有することに重点をおく。そうすることで，子どもが自分自身を**自己評価**することが可能となる。この６つの観点の中のいずれかに焦点化して自分を振り返ることで，現在の自分はどのような力を身につけたのか，課題解決に向けて自分にはどんな力が必要だと考えるのか，またその力をつけるためにどんなことにチャレンジしていけばよいのか，という学びの羅針盤となると考える。

※1 レジリエンスとは「しなやかな強さ」を表し，どんな課題に対して，困難にぶつかっても改善を加えながら，過程や結果に意味や価値を見出し，最後までやりぬくことである。レジリエンスの視点としての「やりぬく」を評価するためには単元における学びの蓄積が必要である。

③　評価の観点の活用

教師も子どもも評価の観点や方法についても共有し，今ある資質からより「未来をそうぞうする子ども」に近づくためにどんなことが必要であるか，立ち止まり，その観点をもとに今を振り返り，次の方向性を見出すための評価の具体的なあり方について研究を進めていくこととした。６つの観点においては，表７にあるように学年の段階や学習内容によって，ねらいとする評価の観点は異なる。各学年の未来そうぞう科の実践においては学習指導案においてねらいとする観点を明記し，評価を行うこととする。

表７　３つの資質・能力の評価の観点とのそれぞれの視点の系統性

観点	①没頭			②協力		③見通し			④整理			⑤発信		⑥レジリエンス		
	①楽しむ			②助け合う		③見通す			④つなぐ			⑤人に伝える		しなやかな強さをもつ		
視点	時間	触れる	姿勢	役割分担	交流	過去	現在	未来	比較	関連付け	分類	相手意識	発信	改善	意味づけ価値づけ	やりぬく
６年																
５年																
４年																
３年																
２年																
１年																

学年の段階による
学習内容による

④学習者を主体とした自己評価の在り方

教師と子どもは１つの授業において，表７の観点を共有した上で，課題解決に向けて活動しながらも時には立ち止まり，今をふりかえり，過去を省みて，未来に思いをはせる。この一連の営みは，授業内における**学習者を主体とした自己評価**をベースとすることで，より活動が推進されていくと考える。しかし，自己評価はただ書かせればいいのではなく，**どのような方法で・どのようなデータをもとに・どのようなタイミングで自己評価するのか**などを検討する必要がある。その点を踏まえ，未来そうぞう科の実践を行い，子どもたちの自己評価をベースとした具体的な評価方法のあり方について検討を重ねている。具体的な評価方法については，ポートフォリオを核に研究を進めている。

○デジタルポートフォリオ

第４学年「Let’s challenge 好きなこと～好きを switch～」は未来そうぞう科のＡ領域の自分自身を対象とする内容である。本単元は自分の好きなことや得意なこと，さらには友だちの好きなこと・得意なことへの挑戦を通して，友だちとの関わりの中で認め合い，自分の好きなことや得意なことを捉えなおすことで，自己肯定感を高めることをねらう活動である。「何かに挑戦し続けてきた自分を意味付けし価値付けすることができる子ども」の育成を目指し，ロイロノートを用いた**デジタルポートフォリオ**を活用した。子どもたちは自分や友だちが挑戦する様子を自分の視点で動画や音声，写真などに記録していった。時には立ち止まり，撮りためたものや友だちのアドバイスなどをもとに自分自身を多角的・多面的に見つめ直す姿が見られた。次のチャレンジへの意欲を高め，明確な課題を設定して挑戦する姿へとつながった。一方で挑戦を進めるものの，なかなか上達せずに，結果だけみると変化がほとんどないような子どもも見られた。しかし，結果だけではなく挑戦している過程でどのようなことが得られているのか，頑張っている姿そのものが素晴らしいことが伝わるように，わずかでも成長を捉えて編集している子どもも見られた。その姿はまさに挑戦し続けてきた自分に意味付けし価値付けする「創造的実践力」を発揮できた子どもであると言える。

デジタルポートフォリオのよさはワークシートには残すことができない学びの過程を子どもの視点で動画や写真，音声などに記録できることである。この記録はワークシートで書いたものよりも生きた記録になり，編集や発信に使えるものとなる。さらに，書くことを不得

手としている子どもにも有効である。しかし，子どもの発達段階やICT機器のスキル面，扱う時のルールづくりなど配慮しなければならない。ICT機器を扱う時に，ICT機器そのものへの誘惑を律して活用できるようになるためには，あらゆる場面でICT機器を使うことに慣れておくことが必要である。本校においては，第３学年が中心となって，ICT機器（主にiPad）の扱い方やICT機器を用いたプレゼンの習得を目指す学習もある。高学年になれば，様々なポートフォリオの方法（ロイロノート，iPadやiPod touchの動画・写真・音声機能，ワークシート，未来ノート）を活動に応じて取捨選択する姿を目指したい。

〇未来ノート

本校では朝のモジュールの時間や未来そうぞう科の授業において，未来ノートを活用している。昨年度は学年に応じて形式を変更したが，教師主体の学習評価の見取りの道具としての扱いとなっていたことが大きな課題であり，書くことを不得手とする子どもには厳しい側面があった。そこで本年度は子どもが「イメージ」を表出するためのツールとして，どんどんかきたくなるノート，自分の広げてきた「イメージ」をかき溜める足跡になるノート。そんな未来ノートを目指し，表紙も中身も無地のノートを準備し活用することとした。

子どもたちは未来そうぞう科の授業のみならず，あらゆる教科でそのノートを活用する姿が見られる。これらの未来ノートにおいては，様々な活動に対する「没頭」する姿や「見通し」をもつ姿を垣間見ることができる。「イメージ」の見える化によって，子ども一人ひとりの考えに教師が価値を見出すことができる。そして，その子のよりよい成長に向けて，指導計画の見直しや教師の手立てを考える。これらを繰り返すことで授業改善が図られ，３つの資質・能力が高められると考える。しかし，子ども自身がこのノートを見返して立ち止まる場面が少ないことから，どのようなタイミングで未来ノートを活用するかについてはさらなる検討が必要である。

３）　各教科における『未来そうぞう』」と「未来そうぞう科」とのつながりの強化

「各教科における『未来そうぞう』」において，　「未来そうぞう科」との親和性を明らかにし，各教科が未来そうぞう科にアプローチすることで，学校全体を通して，未来をそうぞうする子どもを育成することができる。「資質・能力」「イメージ・クリエイト」「教科横断的な学習」の３つの視点からアプローチしていく。

昨年度は各教科の特性を活かして，どのように３つの資質・能力および態度を育んでいくことができるかを各教科が設定し，アプローチした。成果としては，各教科が資質・能力面におけるつながりを意識して，取り組むことができた。また，未来そうぞう科における資質・能力にアプローチしていく中で，それらの資質・能力を育てやすい教科があることや学びのプロセスにおいてつながる教科，さらには，未来そうぞう科と内容面とのつながりが濃い教科など，未来そうぞう科について，様々な視点でのアプローチが可能であることが示された。そこで，本年度は，未来そうぞう科にアプローチしていく視点を①**「資質・能力」**②**「イメージ・クリエイト」**③**「教科横断的な学習」**に焦点化した。そこで教科からどのような視点でアプローチできるかを検討した。次の表８は視点別の教科の一覧である。また，本年度の各教科における研究主題を表９に示す。

表８　未来そうぞう科にアプローチしていく視点とその主な教科

アプローチしていく視点	主な教科
資質・能力	全教科
イメージ・クリエイト	図工　音楽　体育　国語　算数　社会　道徳　外国語
教科横断的な学習	社会　家庭　理科

表９　各教科の研究主題

国語科	「未来をそうぞうする子どもを育むための学びの言語」の習得と活用 ～言葉における認識の機能とイメージとの関連性について～
社会科	価値判断・意思決定しながら，未来を思考する力を育む社会科授業
算数科	「捉えなおし」のできる子どもを育む・学びのプロセス　～場の設定と言葉がけ・価値づけ～
理科	豊かな自然観に基づき，未来を創造する子どもを育てる理科教育 ～社会や自然の諸問題を教材化した単元開発を通して～
音楽科	未来そうぞうの資質・能力を育成する「生成の原理」による音楽授業
図画工作科	造形活動を通して育む未来そうぞうの資質・能力
家庭科	批判的思考力を高め，よりよい未来の生活を創造しようとする子どもの育成
体育科	課題の解決に向けて“運動の楽しさ”をそうぞうする子どもの育成
道徳科	よりよい未来を『そうぞう』するための道徳科の授業づくり ～自己を見つめ，自己の生き方を考える道徳科のカリキュラム開発～
外国語活動	「未来そうぞう」において育成すべき資質・能力を育む外国語活動の授業づくり

①　アプローチ①「資質・能力」

「**資質・能力**」の視点については，昨年度より，教科の特性をいかして，育むことができる力をそれぞれの教科で提案してきた。本年度は主にその資質・能力の育成に焦点をあて研究を進めていく。さらに，他の実践力につながりが見出せるのであれば，そこにも焦点をあてて研究を進めていく。

○ 音楽科　協働的実践力に焦点化した授業実践

音楽科では「未来そうぞうの資質・能力を育成する『生成の原理』による音楽授業」という研究主題のもと，「音楽科における未来そうぞう」を実現するために，「よりよい〈表現〉をそうぞうする子ども」を育むことをめざしている。第６学年では，一弦箱（箱に輪ゴムをかけた楽器）の音色を生かした音楽づくりの実践を行った。そこでは，主体的実践力を働かせて自分の作った一弦箱の音色に耳を傾け，「鐘の音みたい」「花火の音みたい」「お箏の音みたい」とお気に入りの音を探す姿が見られた。そして，その音色をグループに持ち寄り，重ねたり順に鳴らしたりして，自分たちのイメージを表す方法を考え，自分たちの音楽作品をつくりあげていった。その姿から，協働的実践力を働かせることで創造的実践力が働く様子を見取ることができた。

②　アプローチ②「イメージ・クリエイト」

「**イメージ・クリエイト**」の視点については，未来そうぞう科における見方・考え方が大きく関わっている。未来そうぞう科は『各教科における未来そうぞう』において中核であるために各教科の見方・考え方を総合的に働かせてイメージ・クリエイトを往還させながら，対象についてアプローチしていく子どもの姿を想定して学習が展開されている。校内の夏の研修において，それぞれの教科の見方・考え方を出し合い， 各教科の学びのプロセスが未来そうぞう科のイメージ・クリエイトにどのように関わっているのか，さらに教科ごとの見方・考え方が未来そうぞう科における見方・考え方につながりがあるのかを探り，各教科は実践を行う。

○ 算数科　とらえなおしの授業実践

算数科では，とらえなおしのある学習展開を設定した。自分の考えをもとに，他者の考えを受け入れ，自分の考え方を変容させたり，強固にしたりし再構成することに焦点化した学習展開である。２年生「たし算の筆算」では，数を自ら決めて課題を解決する学習展開を行った。子どもは，たされる数とたす数を相互に関係づけたり，それぞれを答えと比べたりしていた。また新たに，きまりを見つけ「もし～ならば」と仮定して考える姿がみられた。このように，数学的な見方・考え方を働かせる学習展開を設定することで，新たに意味や価値を見出す子どもの育成へとつながっていくことが考えられる。

③　アプローチ③「教科横断的な学習」

「教科横断的な学習」の視点については，未来そうぞう科と各教科との教科横断的な学習を行い，未来そうぞう科の内容面での関連はもとより，未来そうぞう科における３つの実践力の育成をめざし，単元開発を行う。

○ 未来そうぞう科，理科，社会科の教科横断的な学習

社会や自然に目を向けたとき，子どもにとって学びの必然性のある題材は身近なところに潜んでいる。しかし，その枠組みを指導者側が理科として捉えた場合，子どもにとって必然性のある学びに各学年の学習内容，理科のねらいなどの視点で制約がかけられてしまい，本校がめざす３つの資質・能力を育みにくい。そこで，本年度はその枠組みを大きく捉えなおして，子どもにとって，必然性のある学びを展開したいと考えた。その具体的な手立てとして，子どもたちにとっての身近な社会や自然における諸問題を教材化し，様々な教科の視点でアプローチしていくような単元開発が必要であると考える。

今年は気象異常により，集中豪雨によって川の氾濫や土石流など各地において見られ，社会問題となっている。本校の近くにも「大和川」が流れ，大雨がある度に災害にあってきた歴史がある。そこで地域の河川を題材に単元開発を進める。以下は第４学年における教科横断的な学習の事例案である。

表 10　第４学年における教科横断的な学習の事例案

学年	事例　単元名	４年 社会科	４年 理科	４年 未来そうぞう科
４年	タイムスリップ～大和川をめぐる過去から未来への命のバトン～	大和川をつくり変えた人々	流水の働き （５年の学習内容）	自分たちの地域の防災

この事例案の学習指導案については，評価の観点を３つの資質・能力で示し，評価についても未来そうぞう科の評価方法を用いて実践していく。これは研究仮説２とつながるものである。２月の研究発表会において授業提案していく。

６　新教科「未来そうぞう科」における質問紙調査による効果測定

先述のように，「主体性」「協働性」「創造性」という「態度」については，「主体的実践力」「協働的実践力」「創造的実践力」に含むものであるが，評価については，「目に見える行動や行為」として捉えることができる資質・能力と，資質・能力に含まれる態度とは異なる方法で捉えたい。

「態度」を把握する方法として，心理尺度を活用した効果測定なども有効であると考えられる。「よりよい未来」について，直接的に自分自身に関わることとして捉えること，すなわち「自分事」として考えることができているかどうか，あるいは見通しを持って考えることができているかどうかについて見取ることができる，信頼性と妥当性を備えた質問紙調査を行い，効果測定を行うことで，研究の成果を実証していくことにする。質問紙については，先行研究における自尊感情や自己効力感等に活用される尺度等を参考にし，本校独自のもの開発し，活用していきたい。

７　研究組織について

本校は研究開発指定を受ける以前より，学校教育目標に即しためざす子ども像に向け，各教科が教科主任会・教科部会・G 教（グループ教科部会）といった部会を構成し，組織的に研究を積み重ねて来た。第２年次以降からは図８のように，従来の研究体制に「未来そうぞう三部会」を加え，全教職員をあげて未来そうぞう科を中心とした各教科・領域の学習を通して，未来をそうぞうする子どもの育成に励むこととした。第３年次からはG 教をどのような視点から本年度アプローチをするのか教科ごとに意見を集め，再編し，研究にのぞめるよう構成した。

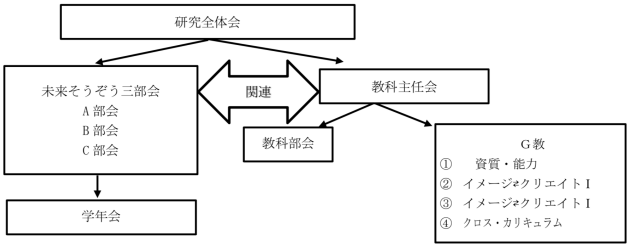

図８　研究組織の構成

８　ＩＣＴを活用した学習展開の工夫について

本校は全普通教室に電子黒板が設置されており，タブレット端末（iPad や iPod touch）を約 200 台保有している。これらの ICT 機器を活用して数年前より「知りたい内容を調べられるようにする，探究における活用」「調べた内容や資料の視覚化・共有化における活用」などの視点から，授業での活用を進めてきた。

また，本校は，パナソニック教育財団の特別研究指定校（平成 28・29 年度）に認定され，「BYOD 社会に対応するスマートディバイスの効果的な教育的利用」を主題として現在研究を進めてきた。BYOD とは「Bring Your Own Device」の略称で，自身が所有するスマートフォンやタブレットなどの情報端末を業務で利用することを意味する。上記のようなこれまでの ICT 活用に加えて，1 人 1 台の学習環境を整えることで，アクティブ・ラーニングの充実や反転学習などの学習スタイルの広がりへとつなげることができると考える。

これまで行ってきた ICT 活用及び一昨年より始まった「BYOD 社会に対応するスマートディバイスの効果的な教育的利用」の研究は，本研究「未来を『そうぞう』する子ども」につながるものであると考える。「1 人 1 台の ICT 機器を積極的に活用する」ことは「主体的実践力」へとつながり，「学び合いとしての ICT 活用」は「協働的実践力」へとつながっていく。さらに「ICT 機器をどのように活用するのか」という視点で考えれば「創造的実践力」にもつながっていく。ICT 機器の活用は，本研究「未来を『そうぞう』する子ども」の育成を目的とする学びの中では非常に有効であると考えられる。

これらをふまえて，新教科「未来そうぞう科」及び「各教科における『未来そうぞう』の時間」において ICT 機器の活用方法や探究方法を探っていきたい。

９　必要となる教育課程の特例

「生活科」「総合的な学習の時間」「特別活動」の全授業時間数を新教科「未来そうぞう科」に充てる。

１）　学校教育法施行規則５０条【教育課程の編成】

表 11　本校が取り組もうとする教育課程の特例と現行の法規による教育課程

本校が取り組もうとする教科・領域	現行の法規による教科・領域
・教科…国語・社会・算数・理科・音楽 図画工作・家庭・体育 ・新教科…未来そうぞう ・道徳 ・外国語活動	・教科…国語・社会・算数・理科・生活 音楽・図画工作・家庭・体育 ・道徳 ・特別活動 ・総合的な学習の時間 ・外国語活動

２）学校教育法施行規則 51 条【授業時数】

表 12　本校が取り組もうとする授業時数と現行の法規による授業時数

本校が取り組もうとする授業時数							現行の法規による授業時数						
	1年	2年	3年	4年	5年	6年		1年	2年	3年	4年	5年	6年
未来そうぞう	136	140	105	105	105	105	生活科	102	105	0	0	0	0
道徳	34	35	35	35	35	35	総合的な学習の時間	0	0	70	70	70	70
外国語活動	0	0	0	0	35	35	特別活動	34	35	35	35	35	35
教科	680	735	805	840	805	805	道徳	34	35	35	35	35	35
							外国語活動	0	0	0	0	35	35
							教科（生活科以外）	680	735	805	840	805	805

３）教育課程の特例の必要性

本研究で新設する「未来そうぞう科」は，1年生から6年生までの一貫カリキュラムを目指すものであり，従来の生活科と総合的な学習の時間，特別活動の学習内容や学習目標を基盤とした教科とするものである。これにより，「未来そうぞう科」は，生活科・総合的な学習の時間の70～105時間，特別活動における学級活動の時間の35時間を合わせて，105～140時間を充てることにする。

【引用文献】

(1) 中央教育審議会　2016　幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）（平成 28 年 12 月 21 日）pp. 28-30